

デジタルネイティブはどのような教育的な映像を視聴したのかについて —視聴形態の整理と教育現場を志す学生への調査から—

荒木 慎太郎†
Shintaro Araki

田原 昌子‡
Masako Tahara

はじめに

テレビが誕生した初期の頃は善良で教育的であることが求められた。1959 年より放送開始された NHK『おかあさんといっしょ』は、教育的なテレビ番組の代名詞である。『おかあさんといっしょ』は現在も放送されており、子どもの目をテレビへと惹きつけている。教育番組は時代の声を取り入れながら、そのエンターテインメント性を高めていく。テレビから始まった家庭での視聴形態も、ビデオやスマートフォンが登場し普及することで、スクリーンは個人視聴の性質を強め、変化し多様化している。視聴環境の多様化において、インターネットの登場、スマートフォンの登場は大きな変化をもたらした。生まれた時にはインターネットがあった世代であるデジタルネイティブは、どのような教育番組の記憶を持っているのだろうか。

まず、家庭内視聴にどのような変化があったのか、整理を行う。次に、保育者・教育者を志す学生へのアンケート結果から、デジタルネイティブである保育者・教育者を志す学生が、どのような教育的な映像と接触していたのか、その記憶がどのように印象付けられているのか検討を行う。

1. 家庭内視聴の変化を整理する

1-1 教育番組のはじまりと母の時間

テレビの登場と普及によって家庭にもたらされた教育番組の中で、最も有名なものは NHK で 1959 年より放送されている『おかあさんといっしょ』であろう。高橋によれば、おかあさんといっしょは「子どもに最高のものを見せる」という考えのもと、文学や音楽や美術など、様々な分野から外部の人材が制作に関わり、以後の幼児番組制作に受け継がれていくという¹。日常の中にある興味深い構造や仕掛けをテーマにした『ピタゴラスイッチ』や、ことばをテーマにした『にほんごであそぼ』は、大人が見ても興味を惹かれるほどにエンターテインメント性が高い。『にほんごであそぼ』を例にすると、過去には狂言の野村萬斎が出演し、現在は歌舞伎の中村勘九郎が出演することから、日本の伝統芸能の俳優を外部人材として活用していることが分かる。『にほんごであそぼ』の番組内で生み出された「ややこしや」を代表とする多くのフレーズには、日本の伝統芸能の声色やリズムが取り入れられ、日本語を学ぶことと同時に日本の伝統芸能を感じることができる。また、ことばに合わせて体を動かすことが意識されており、『おかあさんといっしょ』の制作の中心にあった子どもに良いものを見せることと外部人材の持つ専門性で番組を作ることが現在も受け継がれているようにみえる²。

「おかあさんといっしょ」をはじめとする教育番組は、子どものためだけに作られたのではない。高橋浩一郎はこのように述べている。

『おかあさんといっしょ』は、番組タイトルからも、制作を担当した部署名からも、“幼児向け”というよりは、むしろ“在宅で育児をしている母親とその子どものため”の番組として企画されたことがうかがえる。³

つまり、教育番組の目指す方向とその目的のなかに、おかあさんの時間を作り出そうという狙いがあったのである。教育映像は、その初期より子どもに映像を見せることで母や父の時間を作ろうという目的があり、その目的は現在の親が子どもに映像を視聴させる目的と重なる。

白黒テレビの普及率が 1964 年に 9 割を超え、カラーテレビの普及率が 1975 年に 9 割を超え、高度経済成長期に急速に普及した⁴。テレビが普及することで、お茶の間というテレビ視聴の形態が生まれた。『おかあさんといっしょ』が現在も放送され、うたのおねえさんと人形劇を発展させた姿が現在も人気であることから、『おかあさんといっしょ』の掲げる制作意図は現在も必要とされていることが伺える。このことから、家庭の教育映像は、テレビの初期に作られた子どものためのエンターテインメントと母親の時間を作るために現在も視聴されていると考える。テレビ本放送が開始された 1953 年より 70 年余りが経過し、現在の映像の視聴形態はテレビ視聴に加えてビデオ視聴、インターネット視聴と多様化している。次節では、ビデオ視聴のはじまりについて確認したい。

1-2. ビデオ視聴のはじまり

家庭における映像の視聴形態の変化において重要な事象は、ビデオ視聴の登場が大きな要因であると考えられる。

ビデオ視聴は、ソフト販売による視聴に加えて、録画機器の規格の統一と低価格化によってテレビ放送の録画が一般化することで家庭での重要性を増していく。ソニー製レコーダーの歴史を見てみると 1972 年にビデオデッキが販売されているが、ビデオデッキが家庭での普及をみせるのは 1980 年代後半である⁵。当時、ビデオ記録はベータ方式と VHS 方式があり、規格競争が行われていた。ソニー製のビデオデッキは 1975 年にベータ方式の 1 号が発売されているが、1988 年に VHS ハイファイ方式の 1 号機が発売されている⁶。つまり、1980 年代後半に急速に普及するビデオデッキは、1988 年頃に普及率に見えないビデオテープの規格の統一があり、以後ビデオ視聴が一般化していくことが理解できる⁷。記録媒体や再生装置の規格は量産と一般化によって重要であったと考えられる。家庭にビデオテープが普及することについて、永田大輔は「一般の家庭普及にお

†立命館大学 衣笠総合研究機構アート・リサーチセンター,
Ritsumeikan University

‡京都文教大学, Kyouto Bunkyo University

いて必要だと考えられたのは様々なスローやコマ送り・編集などの機能ではなく、値段かテープの長さかといったコスト的な側面にあったのである。」⁸と指摘している。また、溝尻真也は「ビデオデッキの普及と価格の低下により、ビデオは家庭のテクノロジーからさらに個人のテクノロジーになっていく」⁹と指摘している。ビデオデッキと録用のビデオテープの低価格化によって家庭での録画による視聴が一般化していくことが理解できる。

ビデオの登場は、放送の時間枠にとらわれない視聴環境を作り、同時に好きなものを繰り返し視聴するという繰り返し視聴を生んだ。繰り返し視聴はどのように利用されたのであろうか。大人や青年の場合、興味のあるテレビ番組を能動的に録画し視聴することが可能である。しかし、幼児や小学校低学年児童の場合、録画の操作を行うことは困難であり、当然録画は両親が行うことになるだろう。その場合、子どもが日常的に視聴する番組の中で集中して視聴する番組、つまりはアニメや教育番組などの子供向け番組、もしくは親が視聴させたい教育的な番組というような番組が録画の対象となるだろう。次節では、テレビやビデオがいかに視聴されたかを確認する。

1-3. テレビやビデオがいかに視聴されたかを整理する

テレビのワイド化、大型化、複数所有など家庭内のスクリーンは変化していく。集団視聴されるリビングにあるテレビは大型、個人視聴される自室や寝室のテレビは小型かつ低価格という様子は想像しやすいのではないだろうか。大型であれ小型であれ、テレビでの視聴は家庭内の決まった場所での視聴となる。ビデオの普及によって録画視聴が生まれ、小型化と複数台所持によって個人視聴が進んでいくと考える。すると、タブレットやスマートフォンの登場によって小型化と複数台所有が加速することは理解しやすい。視聴されるスクリーンは、固定された視聴装置から持ち運ばれることを前提とする携帯される視聴装置へと拡がりを見せる。録画視聴の初期、記録と再生に重要であるビデオテープの規格統一に時間を要した。タブレットやスマートフォンといった携帯端末での映像視聴には、記録を必要としない。スマートフォンやタブレットで行うインターネット動画視聴は、スクリーンとなるデバイスと再生するサービスがあれば成立する。スマートフォンの普及率は2010年に9.7%であった普及率が2015年には72%と急速に普及する¹⁰。そして、10代20代30代と若い年代を中心としてスマートフォンの利用が進んでおり、2015年の年代別の子育て世代（20代30代）の利用率は全体に比べてさらに高いことが分かる¹¹。急速なスマートフォンの普及によって、小型の再生装置は一般化したといえる。そして、ビデオの規格統一のような時間は必要ではなく、動画配信サービスにアクセスすればよい。動画配信サービスは、2007年（米国では2005年）にYoutubeがサービスを開始、2006年にニコニコ動画がサービスを開始した。2011年にはdビデオがサービスを開始、2012年には300万人2013年には400万人の会員数を集め、定額見放題の動画配信サービスが普及していく¹²。2013年時点でDocomoは自社製品でテレビでの視聴に対応させる試みを行っており、2013年にGoogleからChrome castが発売、2014年にAmazon Fire stickが発売されるなど、テレビでのコンテンツ視聴が意識され、普及していく準備が整っていく¹³。2015年にはNETFLIX、Amazon prime videoなどのビデオオンデマンドサービスが開始する。2015年に民放放送を期間限定で配信するTVer

がサービスを開始し、スマートフォンやPCで視聴される無料でのテレビ番組の配信が始まる。ACC『TVerの研究』～民放の抱える課題と『TVer』のサービスに関して～において、「家庭のテレビではないデバイスでの動画視聴は今や常態化しつつある。TV番組をTV以外のもので見ることができる環境は、もはや必須ともいえる。」¹⁴と述べられている。これは、2016年に行われた研究会の記事で述べられており、民放もTVerにおいてインターネットでの映像配信を行い、スマートフォンやタブレットでのテレビ番組視聴を意識していることから、2016年には視聴形態の変化を強く意識しながらテレビとインターネットでの視聴が模索されていることが分かる¹⁵。

「幼児はテレビをどう見ているか—2012年6月「幼児視聴率調査」から—」ではこのように述べられている。

これまでの長期的な推移をみると、幼児のテレビ視聴時間は1998年（2時間43分）から漸減し、2007年には2時間になった。2008年以降は、そのまま2時間程度の水準で推移していたが、今年初めて2時間を切り、これまでで最も短い。¹⁶

テレビ視聴時間が減少していることが指摘されており、加えて「ビデオ再生は2002年以降40分弱で推移していたが、今年は46分とやや増加、これに対してテレビ視聴時間は前年に比べ減少した。テレビ減少分の一部がビデオ視聴に充てられた形となっている。」¹⁷と述べられ、テレビの視聴時間の減少に対し、ビデオの再生時間が増加していることがわかる。また、同調査では、「母親と一緒に、幼児がインターネットなどのメディアに接する機会が増えていることも、テレビ視聴を減少させる要因と推測できよう」¹⁸と指摘しており、動画配信サービスが普及していく頃に、テレビ視聴が減少し、ビデオ視聴が増加し、インターネットに接続する機会が増加しているという状況があったことが理解できる。

「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018年6月「幼児視聴率調査」から～」において、「録画DVD再生は、2011年から2013年にかけて増加し、それ以降は同程度で推移している。一方のテレビ視聴時間は、（中略）緩やかな減少傾向であるため、2012年以降、テレビ視聴と録画DVD再生との差は縮まっている状態が続いている。（中略）しかし、テレビ総計の減少分に置き換わるほど、2018年の録画DVD再生が増加しているわけではない。」¹⁹と述べられている。テレビ視聴時間の減少分に置き換わるほどビデオ利用の増加があるわけではないと指摘されており、この一部にインターネット利用があると推測できる。加えて、同調査では、インターネットでの映像視聴について「インターネット動画を見ている幼児の、動画の再生時間は「30分未満」（22%）が最も多く、続いて「30分以上1時間未満」（12%）だった。（中略）インターネット動画を見る幼児は前々年と比べて増加し、50%となった。（中略）インターネット動画は年齢による差がなく、2～6歳の幼児に満遍なく浸透している様子がうかがえる。」²⁰と述べており、2018年時点で幼児の半数がインターネットによる映像視聴を行っており、スマートフォンやタブレットによる映像視聴の割合が増加していることが分かる。2012年と2018年の利用状況を比較すると、テレビ視聴が短時間化し、インターネット利用が急速に増加していることが分かるが、幼児の映像視聴はテレビでの視聴が

主であることが分かる²¹。そして、同調査において保護者は子どもがテレビを見ることについて、「最も多いのは「子どものためになる番組を見せたい」が68%で、次いで「子どもがテレビを楽しむのはいいことだ」46%、「子どもと一緒にテレビを見ることは楽しい」が45%だった。」²²と述べられている。このことから、幼児のテレビ視聴には「子どものためになる」ということが視聴の目的にあり、そして「一緒に楽しむ」という感覚が半数近くあることが分かる。この調査は、2019年調査より「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、インターネット動画の利用状況」と題目が変更されており、インターネット動画利用の調査が開始されている。幼児のアプリ利用という調査項目が設定され、インターネットによる映像視聴だけでなく、スマートフォンやタブレット利用におけるアプリ利用として、映像配信サービスやゲームといったコンテンツについて調査が行われている。このように、スマートフォンが普及し、映像配信サービスが登場し普及していく2015年から前後3年適度の映像視聴の調査を見てみると、視聴環境の変化と、利用の姿の輪郭を捉えることができる。

2. アンケート調査

2-1. アンケート調査の目的

生まれた頃からインターネットが存在した世代は、デジタルネイティブと呼ばれている。現在、保育者・教育者（以後、教育者と呼ぶ）を志す学生は20歳前後であり、デジタルネイティブのなかではZ世代と呼ばれている。現在、デジタルネイティブと呼ばれる世代には、α世代という生まれた時からSNSが存在した新たな世代が存在する。Z世代を対象とした調査は継続して行われており、なかでも「幼児視聴率調査」やNHK放送文化研究所が多くの調査を実施し、蓄積がある。この調査は、その年々の子どもがテレビやビデオ、インターネットというメディアにどのように接触しているのかを調査し実態を明らかにしている。どのような番組が見られているのか、そのタイトルや生活時間と映像視聴の関係を調べる中で、未来の教育者、なかでも現在の教育を志す学生が教育番組や子供向けの映像についてどのような記憶を持っているのだろうかという疑問が浮かんできた。現在の教育を志す学生が教育番組や子供向けの映像についてどのような記憶を持っているのか、その輪郭を捉えるために、アンケート調査を実施した。

2-2. アンケート調査の内容

アンケート調査は、はい・いいえの選択肢と自由回答を主としてアンケートを作成した。内容は、以下の項目である。

①子どものころ（幼児期～小学校3・4年くらい）にテレビの教育番組を見ていましたか？【はい・いいえ】

i それは、どんな番組でしたか？

ii その番組の印象に残っている点を教えてください。（どんな描写であったか？キャラクター等）

②子どものころにスマホやタブレットで動画を見ていましたか？【はい・いいえ】

i それはどのようなデバイスでしたか？（PC・タブレット等）

ii いつから見ていましたか？

③好きだった、印象に残っている番組、動画、チャンネルはありますか？

i その番組、動画、チャンネルの印象に残っている点を教えてください。

④テレビとインターネット動画、どちらが好きでしたか？

【テレビ・インターネット動画】

⑤保護者の方は、視聴時間等に制限をかけておられましたか？【かけておられた・かけておられなかった】

i かけておられた場合、どのくらいの時間ですか？

【A. 1時間程度 B. 2時間程度 C. 3時間程度 D. 4時間程度】

ii 時間以外の何か制限があれば、ご記入ください。

⑥子どものころに見ていたテレビやインターネットと動画は、子どもたちを教えることに役立つことはありますか？

【ある・ない】

i それはどのような点ですか？

上記のアンケート内容は、どのような映像を視聴したのか、その中で印象に残っている事柄を調査することを目的とした。なかでも、設問⑥の子どもの頃の映像視聴が子どもに教えるために役に立つかという問いは、映像視聴の記憶が教育者を志す学生のためにどのように役立っているのか、または、役立つのかを考察するために有用である。教育者を志す大学生の1回生2回生を対象に、アンケート調査を行った。57件の回答が得られ、その中で40件の有効回答が得られた²³。

2-2. 実施結果

「①子どものころ（幼児期～小学校3・4年くらい）にテレビの教育番組を見ていましたか？」の問いに対し、はい38、いいえ2の回答があった。このことから9割以上の者がテレビを視聴していることが分かる。「①i それは、どんな番組でしたか？」という問いに対し、『おかあさんといっしょ』22、『にほんごであそぼ』5、『ピタゴラスイッチ』4、『みいつけた』3など、NHKの子ども向け教育番組が多く記憶に残っていることが分かる。また、『一十百千万の歌』『でんでらりゅうばの歌』という特定の歌に関する回答があり、これは『おかあさんといっしょ』など子ども向け教育番組のなかの記憶として捉えることが可能である。これらのことから、テレビを視聴した記憶の中に、NHKの番組が強く記憶されていることが分かる。NHK以外では、『アイカツ』2『プリパラ』2など、アイドルを描いたアニメのタイトルがあがっており、『仮面ライダー』1など、その時代の流行のアニメが視聴されている様子もうかがえる。「①ii その番組の印象に残っている点を教えてください。（どんな描写であったか？キャラクター等）」の問いに対し、「音楽や歌が印象的」であったと捉えられる回答が8件あり、「一緒に踊っていた」や「一緒に遊んでいた」3などの記憶もみられた。ワンワンやコッシー、体操のおにいさんなどの「キャラクターが印象的」であったと捉えられる回答が12件ある。そのほとんどがNHKの教育番組のキャラクターを回答しており、NHKの教育番組の番組制作が映像視聴の記憶として強く印象付けられていることが理解できる。また、ワンワンやサボテンなど、一緒に歌って踊ることのできるキャラクターの回答が多く、音楽や歌と合わせてキャラクターによって子どもの目を惹きつけていることがわかり、映像視聴の記憶の中にNHKの番組制作の蓄積や狙いに近いことが確かに印象づけられていることが分かった。

「②子どものころにスマホやタブレットで動画を見ていましたか？」という問いに対し、はい20、いいえ20の回

答があり、なかでもタブレット 10、スマートフォン 5 とタブレットでの視聴の方が多い回答であった。また、3DS などゲーム機の回答が 2 件あること、iPod touch の回答が 1 件あることから、当時最新であった音楽再生デバイスやゲーム機などインターネット機能を有するデバイスの利用もみられる。

「③好きだった、印象に残っている番組、動画、チャンネルはありますか？」の問いに対して、幅広いジャンルの回答があった。

『天才テレビくん』2、『はなかつぱ』4、『オフロスキー』、『スイエンサー』、『NHK』2、『できた できた できた』、『こびとづかん』、『ワンワンウィタンが出てくる番組 (いないいないばあ！)』、『おかあさんといっしょ』、など、NHK の教育番組のタイトルが多くみられた。また、NHK で放送されていた、『アイカーリー』、『サムアンドキャット』、『ビクトリアス』、『サンダーマン』などのタイトルが好きであったという回答があり、海外のティーン向け番組が好きであった記憶もみられた。『イッテ Q』、『月曜から夜ふかし』、『嵐にしやがれ』、『VS 嵐』、『ガキの使いやあらへんで！』、などが好きであったという回答があり、バラエティ番組が好きであったという回答もみられた。教育番組が好きだったという回答が多いなかで、2022 年まで 23 時 59 分より放送されていた『月曜から夜ふかし』という放送時間の遅い深夜番組だから好んで視聴されたというわけではないと考えられる。次の質問にある「マツコが好きだから」という回答と合わせて考えると、ファンもしくはキャラクター性を好んでの視聴であることが分かる。番組の内容は教育的ではないものの、マツコのキャラクター性が好んで視聴されたことは、インターネット動画にある趣味的な強い視聴と似たような性質を持つのではないかと考えられる。インターネット動画の番組が好きであったという回答には、「ゲーム実況」、「音楽 (ゲームの BGM)」、「はじめしゃちょー」、「ヒカキン」、「グッチチャンネル」、「マイセンシスターズ」など、Youtuber やゲーム実況動画のチャンネルなどの名前があげられた。Youtuber のキャラクター性やマイクラフトなどのゲーム実況といった特定のインターネット動画チャンネルが好まれていたことが分かる。

「③ i その番組、動画、チャンネルの印象に残っている点を教えてください。」の回答から、なぜ好きなのか、印象に残っている点を確認する。「毎日・毎朝・毎週やっている」2、という回答から、習慣的に視聴するため印象として記憶に残っていることが分かる。「ワンワンが喋っている点」、「はなかつぱ」2、「妖怪ウォッチが好き」、「様々なキャラクターが現実でないことをするため面白かった」、「嵐が好き、かつこよかった」2、「マツコが好き」など、キャラクターや人物が印象として記憶に残っているという回答があった。視聴において、キャラクターや人物に好感を持ち視聴しているとも推測でき、キャラクター性が重要な要素であると考えられることもできる。「豆知識や子どもが実際に試せる実験が面白かった」「海外の番組だからめずらしい感じがした。」などの、興味や関心ごとに関する記憶もみられた。このように、キャラクターや興味など、印象に残ることがらは、特定のキャラクターや興味に多数の回答が集中することがなかった。「①子どものころ (幼児期～小学校 3・4 年くらい) にテレビの教育番組を見ていましたか？」にあったような、NHK の教育番組に回答が集中したこととは結果が比例しなかった。

「④テレビとインターネット動画、どちらが好きでしたか？」という問いに対し、テレビ 29、インターネット 10、無回答 1 の回答があった。「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018 年 6 月「幼児視聴率調査」から～」において、幼児や子どもは NHK のテレビ放送をよく利用していることがわかっており、2012 年頃のテレビやビデオの利用状況と合わせて考えると、今回の回答者が 10 歳くらいの頃はテレビを視聴することが多いと考えられる。テレビが好きという回答が全体の 72%であったことは、当時の視聴環境とも合致するであろう。一方で、インターネット動画が好きという回答も 25%あり、当時の子どもであった回答者は、家庭にインターネットによる映像視聴が普及していく時期のインターネット動画に、好感を抱いている者が一定数存在するという可能性が感じられた。

「⑤保護者の方は、視聴時間等に制限をかけておられましたか？」の問いに対して、かけていた 10、かけていない 29 という結果であった。制限をかけていないという回答が全体の 7 割以上を占めた。視聴時間の制限を受けた中で 1 時間以内 4、2 時間以内 5、3 時間以内 1 との回答があり、2 時間以内の視聴が多いようである。「ii 時間以外の何か制限があれば、ご記入ください」の問いに、「離れて見る」、「寝転んで見てはいけない」など、見る姿勢に関することがら 4 件回答された。離れてテレビを見なさいという指導は、家庭内で古くから行われていたであろう。加えて、アニメの冒頭などテロップによる注意も行われている。家庭においても、視聴距離は注意されており、記憶に残っていることが分かる。「夜遅くまでさわらないように」、「親の監視ができる場所での使用」、という回答があり、タブレットやスマートフォンの個人視聴について注意されたと考えられる記憶がみられた。今回、この項目の回答数が少なかったことは残念であり、回答から何かを明らかにすることは難しい。

「⑥子どものころに見ていたテレビやインターネット動画は、子どもたちを教えることに役立つことはありますか？」という問いに対し、はい 31、いいえ 8、無回答 1 の回答があった。教育者を志す学生の 40 人中 31 人が「役立つことがある」という回答を行っていることは、大きな発見であった。「i それはどのような点ですか？」という問いへの回答から、何が役立つと考えているのかについて考えたい。興味深い回答として、「身近にいかせることはいまでもおぼえているから。R の法則でドライバーは上からゆっくり下に向かってかわかすことや、スイエンサーでは、あついコーヒーやみそ汁は (右回りやじるし) こうやってまぜるのではなく、(左右に回転矢印) こうやってまぜた方がさめやすいことを言っていた。教科書というより、世界のスキルのなものはおぼえやすいので役に立つと思う。」という回答があった。他にも、「映像だとわかりやすい」「目で見てわかりやすい」という回答がある。映像で見た知識や生活の知恵が「なるほど」と思うような気付きや納得に繋がっており、記憶として印象付けられているのではないかと考えられる。この様な映像での視聴は、アンケートにも図での記載があったように、言語化が難しいことがらもグラフィカルに伝えて理解に繋がっており、この記憶が印象的かつ子どもに教えることに役立つという回答に繋がっているのではないだろうか。次に、「「にほんご (えいご) であそぼ」という番組で、楽しくわらべうたを覚えたり、言葉 (日本語・英語) を学んだりすることができるという点です。」という回答もあった。この、遊ぶことや学ぶことに

関する回答には、「リズムにのる点、子どもの頃の気持ち。」「日本の音楽を知れる。(にほんごであそぼ)」「楽しく音楽を学べる」「算数の解説とかもあるし、子ども向け動画は感性が育まれると考える。」「音楽で感情表現ができるということ」など、学び、歌、踊り、に関する回答が11件あった。興味深いことは、『にほんごであそぼ』という学習に楽しくわらべうたを覚える、ことばを学ぶ、という音楽と学習の2つことがらが同時に学ばれており、役立つと回答した点である。学びの初期段階である幼児における基本的な考えを示すものとして、「幼稚園教育要領」があり、平成29年告示の幼稚園教育要領²⁴の幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」には、このように記載されている。

1 幼稚園においては、生きる力の基礎を育むため、この章の第1に示す幼稚園教育の基本を踏まえ、次に掲げる資質・能力を一体的に育むよう努めるものとする。

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」²⁵

幼稚園においては、感じる、気付く、という抽象的なことからの中から学びを深め、そこから考え、工夫をすることで表現力を養う。そして、この表現を養うことを基礎として、学びに向かう力を育てることになる。NHKの教育番組は、子どもの立場で考えながらそのエンターテインメント性を積み上げてきた²⁶。そして、教育の現場においても、子どもの発達段階に応じた学びが実践されている。NHKの番組が教えることに役立つというアンケート回答に、『にほんごであそぼ』や『おかあさんといっしょ』といった教育番組が多いことは、印象に残っているということに加えて、教える立場に立つことで生じる目標設定や目指す方向を模索するために、参考になるということがあって不思議

ではない。このアンケート調査を行うことで、一緒に学び、楽しむというキャラクターや先生（おねえさん・おにいさん）の姿が参照され、教育に活かされるという「見本」として役立つのではないだろうかという気付きを得た。

3. まとめ

テレビ、ビデオ、インターネットを利用した映像視聴の流れを整理することによって、テレビ放送の初期から貫かれる教育番組の制作理念とその番組作りが家庭に必要とされていることを理解することができた。そして、家庭における映像視聴の姿は、ビデオの登場とその再生されるスクリーンの変化によって個人視聴が生まれる。スマートフォンの急速な普及と関連して、NETFLIXなどビデオオンデマンドサービスが始まった2015年を中心とした前後3年のNHK放送文化研究所の幼児を対象とした視聴に関する調査を確認することで、この間に起こった変化について確認することができた。

アンケート調査を行い、教育を志す学生の中にある映像視聴の記憶を確認することで、デジタルネイティブのなかにNHKの教育番組を視聴した視聴体験とその記憶が強く印象付けられていることがわかった。特に興味深いことがらとして、7割以上の者が「子どものころに見ていたテレビやインターネット動画は、子どもたちを教えることに役立つ」と回答したことがある。教育を志す学生が、人を教える立場に立ち、そして自身のなかにある映像視聴の記憶を振り返ることで、子どもと同じ目線で活動する「見本」として教育番組の記憶と体験が役立つと感じたものが多数であったということが分かった。現在、映像文化は娯楽の方法として重要な位置づけであることは明確である。そのなかでも、教育映像の視聴体験は、我々のなかに確かに記憶され、そして教育者を志望する学生においては、子どもと同じ目線を持つために重要となる記憶なのではないだろうか。

今後、歌うことや踊ることなど、表現活動を深め実践していくにあたり、子どもと同じ目線を持って活動していくために、教育映像やそのキャラクターを参照し、新たな実践を行っていきたい。

¹ 高橋浩一郎 2020「NHK 幼児向けテレビ番組の変遷—『おかあさんといっしょ』から広がった在宅向け幼児番組群—」NHK 放送文化研究所 年報 2020 第 64 集 pp.176-177 より引用。

² NHK アーカイブス https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=D0009122169_00000（最終閲覧日 2025/07/15）では、『にほんごであそぼ』で人気となった「ややかしや」という題材について、シェイクスピア原作の狂言と関係し、野村萬斎から番組に提案した経緯が述べられている。制作と外部の人材が意見を交換しながら番組制作している様子が分かる。

³ 高橋浩一郎 2020「NHK 幼児向けテレビ番組の変遷—『おかあさんといっしょ』から広がった在宅向け幼児番組群—」NHK 放送文化研究所 年報 2020 第 64 集 p.173 より引用。

⁴ 総務省 「通信白書昭和 62 年版」 <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/s62/html/s62a02020100.html>（最終閲覧日 2025/07/15）を参考。

⁵ SONY 製ビデオレコーダーの歴史については、SONY

商品の歩み

<https://www.sony.com/ja/SonyInfo/CorporateInfo/History/sonyhistory-d.html>（最終閲覧日 2025/07/17）を参考。ビデオデッキの初期の頃の扱われ方と普及については、溝尻真也

2012「ビデオテクノロジーの歴史的展開にみる技術 / 空間 / セクシュアリティ : 1970 年代日本におけるビデオ受容空間とそのイメージの変遷」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇(2)pp. 47-49 を参考。

⁶ SONY 製ビデオレコーダーの歴史については、SONY 商品の歩み

<https://www.sony.com/ja/SonyInfo/CorporateInfo/History/sonyhistory-d.html>（最終閲覧日 2025/07/17）を参考。

⁷ SONY 製ビデオレコーダーの歴史については、SONY 商品の歩み

<https://www.sony.com/ja/SonyInfo/CorporateInfo/History/sonyhistory-d.html>（最終閲覧日 2025/07/17）を参考。溝尻真也 2012「ビデオテクノロジーの歴史的展開にみる技術 / 空間 / セクシュアリティ : 1970 年代日本におけるビデオ受容空間とそのイメージの変遷」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇(2)pp. 47-49 を参考。

ユース学部篇(2)p.39において、規格の統一について述べられている。ビデオデッキの初期の頃の扱われ方と普及については、溝尻真也 2012「ビデオテクノロジーの歴史的展開にみる技術/空間/セクシュアリティ:1970年代日本におけるビデオ受容空間とそのイメージの変遷」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇(2)pp. 47-49を参考。

⁸ 永田大輔 2016「ビデオにおける「教育の場」と「家庭普及」:1960年代後半-70年代の業界紙『ビデオジャーナル』にみる普及戦略」マス・コミュニケーション研究 (88) p.153より引用。

⁹ 溝尻真也 2012「ビデオテクノロジーの歴史的展開にみる技術/空間/セクシュアリティ:1970年代日本におけるビデオ受容空間とそのイメージの変遷」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇(2)pp. 48-49より引用。

¹⁰ 総務省 「情報通信白書令和4年版」
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/nd238110.html> (最終閲覧日 2025/07/24)を参考。

¹¹ 日本リサーチセンター「パソコン・スマートフォンなどの情報機器調査 2023年2月4月調査結果」
<https://www.nrc.co.jp/report/231211.html> (最終閲覧日 2025/07/24) p.7を参考。

¹² Docomo 報道発表資料「「dビデオ」の会員数が400万を突破」
https://www.docomo.ne.jp/info/news_release/2013/03/19_00.html (最終閲覧日 2025/07/24)を参考。

¹³ Docomo 報道発表資料「「dビデオ」の会員数が400万を突破」
https://www.docomo.ne.jp/info/news_release/2013/03/19_00.html (最終閲覧日 2025/07/24) NHK放送文化研究所「Amazonが動画見放題サービス「プライム・ビデオ」開始」
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/focus/811.html> (最終閲覧日 2025/07/24) NHK放送文化研究所「Netflix,日本でサービス開始」
<https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/focus/802.html> (最終閲覧日 2025/07/24)を参考。

¹⁴ 一般社団法人ACC 『TVerの研究』～民放の抱える課題と『TVer』のサービスに関して～ <https://www.acc-cm.or.jp/activity/committee/tver/#:~:text=%E3%80%8ETVer%E3%80%8F%E3%81%AF2015%E5%B9%B410%E6%9C%88%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80%82> (最終閲覧日 2025/07/24)より引用。

¹⁵ 一般社団法人ACC 『TVerの研究』～民放の抱える課題と『TVer』のサービスに関して～ <https://www.acc-cm.or.jp/activity/committee/tver/#:~:text=%E3%80%8ETVer%E3%80%8F%E3%81%AF2015%E5%B9%B410%E6%9C%88%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%88%E3%80>

%82 (最終閲覧日 2025/07/24)を参考。

¹⁶ 関根智江 2012「幼児はテレビをどう見ているか～2012年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2012年10月号 p.42より引用。

¹⁷ 関根智江 2012「幼児はテレビをどう見ているか～2012年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2012年10月号 p.52より引用。

¹⁸ 関根智江 2012「幼児はテレビをどう見ているか～2012年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2012年10月号 p.57より引用。

¹⁹ 星暁子 行木麻衣 2018「「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2018年10月号 p.75より引用。

²⁰ 星暁子 行木麻衣 2018「「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2018年10月号 p.76より引用。

²¹ 星暁子 行木麻衣 2018「「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2018年10月号 pp.76-77より引用。

²² 星暁子 行木麻衣 2018「「幼児のテレビ視聴、録画番組・DVD、の利用状況～2018年6月「幼児視聴率調査」から～」放送研究と調査 2018年10月号 p.77より引用。

²³ 回収した57件のアンケートのうち、17件が裏面のアンケート項目に気付かなかったようである。そのため、17件のアンケート内容における約半分の回答が白紙回答であったため、有効な回答とせず、結果40件の有効回答となった。

²⁴ 文部科学省 平成29年改訂幼稚園教育要領
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (最終閲覧日 2012/07/23)

²⁵ 文部科学省 平成29年改訂幼稚園教育要領
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (最終閲覧日 2012/07/23) pp.3-4より引用。

²⁶ 高橋浩一郎 2020「NHK 幼児向けテレビ番組の変遷—『おかあさんといっしょ』から広がった在宅向け幼児番組群—」NHK放送文化研究所年報2020第64集 pp.187-197
には、母と子のテレビタイムゾーンの新設から『いないいないばあっ!』ができるまでの番組開発の様子が述べられている。同p.191には、「『英語であそぼ』を始めとする番組群では、(中略)より「幼児自身が面白いと思う」感覚に訴えかけるような番組が登場していく。」と述べられており、初期からある幼児に最高のものを見せることや、幼児が踊れる動きを考えるなどの基礎の上にエンターテインメント性が醸成されるようにみえる。